



# 学校だより

9月号

令和5年9月1日

足立区立舎人第一小学校

校長 濫谷あゆみ

## 「考える力」を育てる

副校長 山田 実也

子供の「考える力」の基盤を育てるためには、様々な体験を通して、子供自身が「不思議だなぁ」と感じる経験を重ねていくことが必要です。そのためには、文字や映像だけではなく、実際にいろいろなものに触れ、様々な失敗をして、思い通りにならないことをたくさん経験させなければなりません。例えば、いそがしい中、仕事や家事をやりくりして、休日に親子で動物園に出かけたとします。しかし、それがそのまま、子供の「豊かな体験」に結び付くわけではありません。そこには、大人が忘れてはいけない大切な視点があります。

ある人が、小学生の子供を連れて動物園に行ったときのことで、普段できない体験学習の絶好のチャンスと、両親はいろいろと下調べをし、動物の生態を聞かれても答えられるようにと万全の準備をしました。ところが、動物園に行く途中に通った公園で、その子は地面に咲いているタンポポの花や綿毛に興味をもち、夢中になって綿毛を吹き飛ばし始めてしまいました。こんなとき、皆さんならどうされるでしょうか。もしかしたら、「何をしているの？動物を見る時間がなくなっちゃうよ。ほら、早く行くよ。」と子供を急がせてしまうかもしれません。しかし、「豊かな体験」という視点で考えてみると、キリンやライオンを見ることよりも大切なポイントがここにあります。それは、日常とは違う環境の中で、子供たちの知的好奇心に刺激を与えることです。子供と一緒に、「たくさん飛んでいくね。どうして吹いただけで遠くまで飛んでいくのかな？綿毛はどんな形をしているのだろう？」などと話しかけてあげたら、たかだか30分程度の遅れは、スケジュール通りに進んだときよりも、はるかに有意義な時間になるに違いありません。



今の時代、子供たちに「豊かな体験」をさせることは、時間とお金がかかるイメージがありますが、決してそんなことはありません。ハイキングに行ったときに見た空の色が、いつも見ている空よりも鮮やかだと思ったら、子供は「どうしてこの空の色はこんなに青いの？」と驚きます。自分が知っている知識と自分の目の前の現実が違うとき、子供たちの目は好奇心で輝き始めるのです。たとえ遠くに出かけられなくても、家の近くの公園を一緒に散歩するだけでも、子供の好奇心はいろいろと触発されます。

大人が心に余裕をもって、子供たちの「なぜ？どうして？」という問いに向き合い、子供の「不思議」や「疑問」に対して、決して大人の「常識」で答えを出さずに、同じ目線で一緒に興味をもってあげながら子供たちを「自分で考える道」へと導いてあげることで、子供たちは自然と「考える力」の基盤を固めていきます。

学校でも、「豊かな体験」を通して、子供たちの中に「考える力」を積み上げていきたいと思えます。

～ご報告～ 8月26日（土）に開催された全日本小学生バンドフェスティバル



東京都大会で、本校ジュニアバンドクラブが金賞を受賞いたしました。

